

4) 保育の場における両義性

総研ビル11F19会議室 S22

—「一人一人を大切に」と「みんな一緒に」の狭間で—

講演者： 鯨 岡 峻 (京都大学)

対話者： 榎 沢 良 彦 (富山大学)

〈要旨〉

保育の場は、一見相矛盾する二項の緊張関係の上に築かれている。一つは「認め・支える」と「教え・導く」の二項であり、いま一つは「一人一人を大切に」と「みんなと一緒に」の二項である。ところがこの二項は、認め・支えることが教え・導くことを背後に潜ませていたり、逆に教え・導くことが認め・支えることを基盤にしていたりというように、メビウスの帯のように捻じれた関係にある。「一人一人を大切に」と「みんなと一緒に」の二項についても同様である。このような保育の場の両義性と保育実践との関係について考えてみたい。

〈講師略歴〉

鯨 岡 峻 (くじらおか・たかし)

1943年生まれ。

京都大学大学院文学研究科修士課程修了。

島根大学教育学部教授を経て、

現在、京都大学大学院人間・環境学研究科教授。

主要著書：「心理の現象学」(世界書院)

「原初的コミュニケーションの諸相」(ミネルヴァ書房)

「両義性の発達心理学—養育・保育・障害児教育と原初的コミュニケーション—」(ミネルヴァ書房)

(訳書)

パウアー「ヒューマンデベロップメント」(ミネルヴァ書房)

メルロ＝ポンティ「意識と言語の獲得」(共訳 みすず書房) ほか

5) 子どもをとらえる多重の場所(トポス)

総研ビル12F大会議室 S23

—居場所とライフ・ストーリー—

講演者： やまだ ようこ (京都大学)

対話者： 高 杉 展 (松山東雲短期大学)

〈要旨〉

子どもの行動をよく見ることは保育の基本である。しかし、私たちは、ありのままにものを見ることが出来るのだろうか。場所(トポス)モデルをもとに、映画「羅生門」などを例に、視点と語

りの多重性について考える。保育に、場所的見方を入れると、どうなるか。ライフ（いのち、生活、人生）はどのように物語られるのか。観察記録は、どう書いたらいいのか。場所モデルは、時間を空間化する試みでもある。従来の発達心理学の発達観を見直し、生涯発達という長い時間軸から、子どもの「現在」を、過去とつなぎ未来の可能世界にひらく生成のライフストーリーを考えてみたい。

〈講師略歴〉

やまだようこ（山田洋子）

1948年岐阜県岐阜市生まれ。

名古屋大学文学部哲学科（心理学専攻）卒業。

愛知県心身障害者コロニー中央病院勤務を経て、

名古屋大学大学院教育学研究科博士前期課程を修了。

愛知淑徳短期大学コミュニケーション学科助教授を経て、

現在、京都大学大学院教育学研究科教授。

主要著書：「ことばの前のことば—ことばが生まれるすじみち」（新曜社）

（日本保育学会文献賞受賞）

「現場心理学の発想」（新曜社）

「生涯発達心理学とは何か」（金子書房） ほか

6) 子どもの虐待はどうして起こるか

短大L館 3F 301 S24

講演者： 帆 足 英 一（東京都立母子保健院）

対話者： 庄 司 順 一（日本子ども家庭総合研究所）

〈要旨〉

乳幼児に対する虐待は、子どもの権利を損なう象徴的な出来事であり、その増加は、親自らの「親に十分に愛された経験の乏しさ」と「耐性の欠如」によるものが大きい。このことは、現代の若い親を育ててきた豊かな時代における子育ての影響を受けたものであり、ジェネレイティブ・クライシスといわれる世代間の問題といえよう。従って、今日の少子化時代における子育てをいかにすべきかが問われており、保育所を中心とした育児支援の重要性もそこにある。小児虐待という不幸な出来事をいかに予防し、あるいは虐待を受けた子どもへの適切な援助をいかにすべきかが課題となろう。